The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「多情」攷 : 江西龍派詩に見える詩語の解釈をめぐって
Author(s)	中本, 大
Citation	詞林. 1991, 9, p. 42-57
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67302
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「多情」攷

―江西龍派詩に見える詩語の解釈をめぐって―

中本　大

一

禅僧が詩を製す――室町時代中葉、既に日常となったこの行為で最も肝要となるのが詩語の選択である。大陸禅の教義や宋学の齎来により、これまでの日本にはない多様な語彙を獲得した禅林の学僧は、一方、文学的な詩作に用いる言葉に関してはいかなる過程を以て受容していたのであろうか。

竹間ノ芍薬　　江西

芍薬駐レ春ヲ叢竹ノ間　　関レ門ヲ清賞シテ夜ル忘ルレ還ンコトヲ
為メニ報ス最モ有ニ多情ノ処一　　寒緑ハ是レ心紅ハ是レ顔

一二ノ句。百花ハ。落尽シタレトモ。芍薬独リ。駐テレ春ヲ叢竹ノ間ニ。開ケタルソ。門ヲトザシテ。此花ヲ愛シテ。夜ニイルマテ遊ンテカヘランコトヲ。打忘タルソ。〇三四ノ句。此花ト竹ト見ルニ。最モ多情ナル処アルソ。多情トハ。断腸ノ心也。竹ノスヽシク。緑ナルヲ心トシテ。花ノ紅ナルヲ。顔色トスルホトニ。一段アチキナク思フソ。心ト云イ。顔ト云イ。無双ノ美人ト。見ヘタソ。捻シテ竹ヲ美人ニ比シテ。翠袖佳人ト。ナヅクルソ。

右は室町後期の禅僧、如月寿印の手になる仮名抄物『中華若木詩抄』所収の江西龍派（一三七五～一四四六）詩とその解釈である(1)。叢竹の中で独り春を惜しむが如くに佇む芍薬の美しさを、佳人に譬えて詠じた七絶である。

第三句、江西はこの光景を「最有多情処」と表現している。そしてこの語を如月は書中、「多情トハ断腸ノ心也」と解している。「多情」は江西詩に多く見られる詩語である。蔭木英雄氏に拠ると、その使用は十六首にも及ぶ(2)。室町期中葉の詩僧、江西龍派は頻用する「多情」の中に何如なる心象を抱いていたのであろうか。

言うまでもなく「多情」は古来、詩人を誘慕してきた措辞であった。本邦にあっても事情は同一である。平安期の大家、菅原道真の家集『菅家文草』を繙いても多くの用例を見出すことができる(3)。

適遇二多情垂レ釣叟一　　各言二其志一不レ言レ魚

（「春日独遊」三　二四九転結句）

の如く、多情は不遇を嘲つ者の多感な思いや多愁を示すものであった。また次の一聯は、

一片心猶重　　多情手自伝

（「石硯」四一二頷聯）

『芸文類聚』雑文部「硯」門に採録された『陳留志』を出典とする以下の逸話に拠る表現である。

陳留志曰。范喬年両歳、祖父馨卒。臨終、撫二其手一曰。恨不レ見二汝成人一。以二吾所レ用硯一与レ之。始五歳、祖母以二此言一告レ喬。喬便執レ硯涕泣。

（『芸文類聚』巻五十八　雑文部四　硯）

第一行傍線部より、「多情」が「多恨」に置き換え得る措辞であることがわかる。更には、

西方若有二多情者一　　応道便栽二仏種花一

（「和下紀処士題二神泉一之二絶上」四七一転結句）

の如くに、仏家的な「多情仏心」を示すものも存する。

多情に限らず、「秋情」「旅情」「野情」「高情」「浅情」等、道真の用字は実に多彩である。こうした背景には当然、白居易の影響が想定されるであろう。

劉家花　　白居易

劉家墻上花還発　　李十門前草又春

処処傷レ心心始悟　　多情不レ及少情人

（『白氏文集』巻第十五）

右は著名な白居易作「劉家花」七絶である。「もしも私が何にも感動しない人間であったならば、自然の些事に一喜一憂し、心を傷めることもないのです。」とするこの作は、道真「春日独遊」詩の興趣と共通するものである。この他、白楽天詩に見える「多情」の語は数多いものの、それらは次の詩例の如く、

郇南無レ限桃花発　　唯我多情独自来

（「下邽荘南桃花」第一、二句）

唯有多情元侍御　　繡衣不レ惜払レ塵看

（「駱口駅旧題詩」第三、四句）

今朝共語方同悔　　不レ解多情先寄レ詩

（「江楼月」第四聯）

山郵花木似二平陽一　　愁殺多情聰馬郎

（「亜枝花」第一、二句）

独宿相依久　　多情欲レ別難

（「別春炉」第三聯）

紫微閣老自多情　　白首園公豈要レ迎

（「陝府王大夫相迎偶贈」第一聯）

自然の景物や朋友との別離に愁殺される多感な心情を描いたものであり、道真詩と同様、「多感」「多愁」「多恨」の義に通じる表現に限られている。

一方、五山の禅僧にとって白居易は必ずしも親しまれた作家ではなかった。しかし白詩風を愛しみ、継承した中晩唐の諸詩

家の詠作は五山詩僧に最も膾炙した詩群であった。江西龍派自身も晩唐詩を特に好んで称揚していたことが次の七絶からも充分に窺える。

秋夕留客論詩　　江西龍派

点検平生古錦囊　　点検す平生古錦の囊
十篇九是写愁腸　　十篇九是れ愁腸を写す
与君明日又離別　　君と明日又離別す
竹院秋声話晩唐　　竹院の秋声晩唐を話す

（『続翠詩藁』（4））

晩唐詩の五山での瞠目すべき隆盛が、『三体詩』受容を介在していたことは改めて言及するまでもあるまい。南宋の周弼編撰『三体詩』所収の中晩唐詩は、叢林の詩僧にとって初学の頃から最も身近で、最も重要な製詩の啓蒙書であった。白居易の好尚した「多情」はまた、『三体詩』に採録された他の晩唐詩人の作品にも多く見在する詩語でもある。それら『三体詩』中の用例を検分し、その解釈を考証することは即ち、唐土の詩風を踏まえた五山詩僧の詩観形成の過程を考察する有効な方法であると思われる。

こうした禅僧の詩観及び詩論を直接看取し得るものの一つに、「抄物」と称される禅林の講説書群がある。これらは室町期の口語資料として、国語学者により夙に注目される所であった。しかし、唐宋の詩家の別集や総集を釈した「抄物」は他方、五山詩研究の上でも往時の詩語解釈のみならず、その変遷までも確認し得る第一等資料であり、等閑視すべからざるものである。中でも『三体詩』は特に盛んに講説の場が設けられ、多数の抄録が残されることになった。

蘇軾詩と共に、伝授に師承関係が確立していた『三体詩』では、師説を尊重し、それを踏襲することが講釈の基本であった。だが今日、抄の多くは亡佚し、現存する一部のみから、その伝授や師承関係の断片を辿り得るに留まるという状況である。その中で、室町後期の月舟寿桂（一四七〇～一五三三）の著した『三体詩幻雲抄』（以下『幻雲抄』と略す）は特に重要な一書である(5)。絶句のみを註した此書は、鎌倉期の龍山徳見・中巌円月以来の『三体詩』注疏諸説を集成しており、歴代の解釈を俯瞰し得る有意義なものである。斯書を繙くに、江西説の引用は多岐に亘り、『三体詩』伝授における江西龍派の重要性を立証するものとなっている。

杜詩を講じて『杜詩続翠抄』、蘇軾詩を講じて『天馬玉沫』を著した江西は五山における古典学の泰斗であった(6)。そして更に『三体詩』についても、義堂周信・絶海中津という中巌円月以来の系統のみならず、別系の観中中諦の説も享受し、「遂に両系統における諸説を、折衷し」（山岸徳平氏『五山文学集　江戸漢詩集』（日本古典文学大系89）解説）、自らの解釈を作り上げるという注目すべき位置に彼はあったのである。

如上の系譜を前提として本稿では第一に、五山の『三体詩』等詩文の注疏の中から詩語「多情」に関わる問題点を抽出し、

江西の解釈を中心に検討することで五山詩僧の詩語獲得の過程を概観する。次いで第二に、冒頭、江西詩の製作契機及びその作品の内含する特質を確認していくことを目的とする。

二

『三体詩』所収の七絶の中で、詩語「多情」の用例は三作に見られる。その一、晩唐の詩人唐彦謙の「韋曲」詩の起・承句、

欲レ写二愁腸一愧二不才一　多情練漉已低摧

について『幻雲抄』では続翠、即ち江西の釈として次の説を紹介している。

欲写――続翠（江西）云、此詩不審也、逢二天下乱一、…
…〈中略〉……我ハ乱後自離二別故郷一以来、無二定跡一、
故嗅レ花写レ愁也、　（括弧及び訓点は筆者）

第一句の措辞「写愁腸」は、前掲江西「秋夕留客論詩」七絶にも用いられており、五山僧の詩嚢の中にある表現である。此詩で江西が不審を呈しているのは第二句の解釈である。承句の「練漉」「低摧」の二語は、本国『三体詩』注釈の基盤となった宋代の季昌注以来、語意不詳の表現とされてきた。しかし、それに江西以下五山詩僧は一つの解釈を提示したのである。同じく『幻雲抄』では、

欲写愁――其愁情ノ多キニ絹ヤナントヲ練リ洗フテ、モミソコナウヤウニ憤悶ニモミソコナワレテ身モクツレハテ、低摧シテクツタリト成ル也

と記す。即ち、憤悶のために揉み損なわれた絹のように心身の疲れ果てた様として理解するのである。文中、江西がこの両句を「天下は干戈のために混乱し、故郷からも遠く離れた作者唐彦謙は、もはや自身の才能を発揮する場も失い、ただ詩作に耽ける身となったことを嘆くばかりである」という独自の視点で捉えていることは注目される。第一句、「愧不才」を逆説的にも解しているのである。しかし、「多情」については「愁情ノ多キ」とし、白詩の用法と異なる見解は示されていない。

「多情」を「愁情」と解する例は他に一首、雍陶「過南隣花園」絶句の釈に見られる。同詩の第一・二句、

莫レ怪頻過二有レ酒家一　多情長是惜二年華一

を『幻雲抄』の注では、「村云」として村庵、希世霊彦（一四〇三～一四八八）の説を紹介している。希世は惟肖得巌（一三六〇～一四三七）・江西ら応永期の主要詩僧に師事し、詩文を学んだ室町期中葉の代表的学僧であり、禅林『三体詩』講義の中心となった人物である。『幻雲抄』にも江西と並んで多くの説が引用されており、後生への影響の大きさを窺わせている。その希世の釈を録したものとして『聴松和尚三体詩抄』なる抄物が蓬左文庫に蔵せられている。斯書では、先掲雍陶詩について次のように抄している。

莫怪―言ハ、我カ此ノ程シケ〳〵ト頻ニ南隣之華園有レ酒

処ノ家ニ往来シ過ルハシ怪ナソ、ユワレアリ、ナセニナレハ、酒ヲ飲テコソ流年ノ愁多情ヲモ忘レン□（年か）華ノ可レ惜処ハ花開ケテ、又ヤカテ落ル時モ有也、花ノ開ヲ見テウレシウ思ヘハ纔ノ間ニ、又吹レ花ヲ落セハウラメシキ也、サルホトニ此ノ愁ヲハ酒ヲ飲テ、忘レイテル也　村云、花見ヨト霞ヲ掃フ春風ヲウシトヤ云ワンウレシトヤ云ワント云歌ハ此ノ詩ノ心ニ打似タホトニ、此ノ詩カラ続也、其カ是祖歌也

（補書及び傍線は筆者）

「多情」は「流年ノ愁」である。それは花開けども、嘆賞する間もなく風に吹かれ散り落つ花、即ち春の風物の無常さに一喜一憂する感傷に他ならない。正に前掲、白居易作「劉家花」と同一の心情である。その感懐を希世は傍線部、「花見ヨト云々」という証歌一首と共に記しているのである。希世のこの説は、和歌も含め『幻雲抄』への採録と完全に一致する。後代にも継承された解釈だったのであろう。

以上、「情」を「愁情」とするのは晩唐に限らず、唐土にあっても最も妥当な詩語解釈であった。宋詩を例にとっても、北宋最大の詩家、蘇東坡の作で、禅林でも殊の外人口に膾炙した「宿州次韻劉涇」律詩の頷聯などはその典型であろう。

多情白髪三千丈　無用霜皮四十囲

『四河入海』では万里集九編『天下白』を引用し、同聯を次のように釈す。

白云……〈中略〉……多――坡言ハ我レ致二君於堯舜一、救二民於土炭一、テト思フ其多情ニヨリテ白髪已ニ三千丈ソサテ我カ材ハ大ナレトモ用ニタヽスシテアル程ニ霜皮四十囲ハカリ古柏ノ小用ニ不立シテイタツラニクチハツルト同シキソ……〈以下略〉……

（『四河入海』巻第十八）

その意図する所は、救世斉民の高い理想を掲げながらも、志は為政者に容れられず、君恩の施されることのない老進士の悲嘆の姿である。君臣への強い思い入れが即ち「多情」なのである。『四河入海』では言明されないものの、東坡の措辞が、

白髪三千丈　縁愁似箇長

とする李白作「秋浦歌」の情景を踏まえていることは、一目瞭然である。これにより東坡詩の「多情」も「愁情」と解されたことが明らかであろう。

東坡詩の用例のように、詩語「多情」は景物に託して自らの境遇を嘆ずる場合に用いられることが多く、憂愁を表す語として捉えられるのが第一義であった。こうした解釈が本国禅林でも承継されたのは当然である。『中華若木詩抄』に収められた惟肖得巌作「梨花白頭鳥図」七絶もそうした詩観に連なるものである。その第一・二句、

人生易老是多情　人生老い易きは是れ多情のためなり
鳥亦白頭何不平　鳥も亦白頭なるは何の不平なるぞ

を抄中、

○一二ノ句。人生ノ間ニ。年ノ老イヤスイコトハ。コヽロイゴトノ。多キニヨリタコトゾ。……〈以下略〉……

（傍線筆者）

と釈す。それは正しく「多情不及少情人」と認めた白詩に類する用法である。

三

しかし、禅林における詩語「多情」の解釈は、白居易に連なる用法のみには限られなかった。『中華若木詩抄』には江西・惟肖の前掲作の他に一首、「多情」の措辞の見える作がある。伝未詳の五山僧、仰之□岱の手になる「寄故人」詩がそれである。抄ではその起・承句を次のように解している。

風月多情天ノ一方　征鴻滅ス処暮天長

○一二ノ句。故人ニ別レテ。遠方ニアレハ。風月ヲ見ルニタヾ心ニハナク。多情ヲ倍スノミ也。……〈中略〉……多余リ。ソナタヘ。飛行ク雁マテモ。ナツカシサニ。日暮ノ。ツク／＼トナガムレバ。飛行ク雁モ。程ナク見ヘズ。ア暮天ノ長キマデ也……〈以下略〉……

惟肖得巌の別集『東海瓊華集』に「寄岱仰之詩序」の一文が見えることから、作者岱仰之は明徳・応永期頃の惟肖と親交のあった禅僧であることが知られる。その仰之「寄故人」は、詩題から表現に至るまで、やはり『三体詩』に収められた張俔作「寄人」に依拠していることが明白である。

寄人　張俔

酷憐ニ風月一為ニ多情一　還到ニ春時一別恨生
倚レ柱尋思倍惆悵　一場春夢不ニ分明一

この七絶の第一句を、本国『三体詩』抄物の一つで律詩までの全作品を網羅することから、これまで広く研究者にも利用されてきた雪心素隠編『三体詩素隠抄』(7)では、

酷タ憐ム、風月ノ為ニ多情ナルコトヲ

という訓読を施している。「私が千々に思い乱れるのは、風月があまりにも感興をそそるからなのです」という解釈である。しかしこれでは、「風月を見ても心には留まらず、遠く離れた故人を思う気持が募るばかりです」とする仰之詩の釈を導くことはできない。その点に注目しつつ他の『三体詩』抄物を繙くと、『幻雲抄』では江西の言として次の説を伝えている。

酷憐―――続翠云、酷憐ニムヘ――ヲ為ニタメ多情一ナルカ　言ハ風月ノ面白キテハナシ人ヲ思ホトニ一夜不レ睡シテ咏タソ……〈以下略〉……

つまり第一句は、

酷タ風月ヲ憐ムハ多情ナルカ為ナリ

と訓読すべきことを前提とし、「自分が物思いに耽けっていると、風月もその心情に相応しい興趣あるものとなる」のであり、『素隠抄』の提唱する如く風月が人恋しさを募らせるのではないことを明言しているのである。これこそ『中華若木詩抄』の

仰之詩注と一致する解釈である。抄者如月が江西の示す訓読に拠ったことは明らかであろう。一方、『幻雲抄』には『素隠抄』と同様の訓読を掲言する説は他には全く見られない。これは、『素隠抄』が『幻雲抄』の如き正当な五山詩壇の潮流からは一線を画した場で施された注疏であることを物語っていると思われる。

さて、江西の説では詳しく言及されなかった張侹詩の製作契機が、後の希世霊彦に至って明確に示されることになる。『聴松和尚抄』では詩題を注し、

是ハ恋之詩也、哀別之情ヲ作也

と艶詩であることを明記し、次いで、

酷憐ニコトハ――ヲ――ニ――ノ　言ハ此ノ間モ愛レシテ風月ヲ、張侹月ノ花ノト云モヲノレ一人多情□□□（ニシテか）情ノ切ナルニ因テ也、而モヲノレニソウテ居ル時コソ風月ヲ見テモ面白ケレ……〈以下略〉……

（補筆筆者）

と述べる。即ち「ヲノレ一人多情」にして「（人の）ヲノレニソウテ居ル時コソ風月ヲ見テモ面白」いのであり、常に作者自身の心情を中心とする解釈を示しているのである。美人への恋情が自然の情景を面白くもさせ、或いはつまらなくもさせるという、張侹詩に於ける「多情」は「恋情」、恋の思いと同意である。「人ヲ思ホトニ一夜不レ睡」とした江西も、同詩第三・四句の釈では、

春ハ陽気カ発生スルホトニ夢カナンソニ双ニ連理枕一分合歓被トカミタホトニヌカ思カ生シタ毎句已忘タレハ夢ニ見テ思イ出シタト作ル也……〈以下略〉…

（『幻雲抄』）

「連理枕」「合歓被」等の語を用いており、斯詩を唐土六朝の『玉台新詠』等に所収される閨怨詩の系譜に属する艶詩と見做していたことが分かる。

「多情」が恋情、更に卑近には淫情を表すという認識は江西・希世以前、既に唐土にあって提示されていたものではあった。五山で最も普及した詩作の手引書である元代陰時夫編の韻書『韻府群玉』の巻第七、下平声第八「庚」韻「情」字部では「雖老多情」の項目を設け、

雖老多情　○徐娘雖老猶尚多情

の一文を記し、多情が淫情を示すことの用例としている。この記述は正史『南史』の元帝徐妃伝の次の逸事に基づくものである。

元帝徐妃、諱昭佩、無ニ容質一、不レ見レ礼レ帝、三二年一入レ房、帝左右暨季江有ニ姿容一、又与淫通、季江毎歎曰、……〈中略〉……徐娘雖レ老猶尚多情

『韻府群玉』は簡便な類書としても五山で重用されており、禅僧がこうした発想をも幼学の段階で詩嚢に獲得していたことも十分想定する必要はあろう。おそらく江西や希世も『韻府群玉』を根拠に、詩語「多情」を恋情と解する正当性を見出したもの

と思われる。

蔭木英雄氏は前述の如く、「多情」を多く自作に用いる江西の詩風に注目され、それを「愁」字の用法に列なるものとして捉えられ、「〝多情〟の語を吐く江西は、又、芸術的資質を有する人であった。」と述べておられる。しかし江西の詩作の中で「多情」は、これまでの詩人の措辞では全く意図されない、新たな解釈を持った詩語として発芽し、後世に継承されていったのである。『中華若木詩抄』での如月の仰之詩への抄文も、当然こうした解釈を踏まえた上でのものだったであろう。白居易や蘇軾の用法に依拠するならば、仰之詩の「故人」や張俞詩の「人」を「美人」「恋人」と解す必然性はない。しかし本国五山詩壇にあっては江西により「多情」を恋情と解す独自な詩語解釈により艶詩とされ、希世らがそれを後代継承するという展開の中で、最も妥当な注釈として文壇の正統とされるに至ったのであった。

四

江西により敷衍した詩語「多情」の解釈の独自性は、冒頭、江西の「竹間芍薬」詩の釈に見える「多情トハ断腸ノ心也」の意味を考えることで更に明らかになるのである。

「杜鵑断魂」と並称される「断腸猿」の故事により広く人口に膾炙した詩語「断腸」もまた、唐人の好尚した表現であった。『中華若木詩抄』では、著名な杜甫「漫興」詩に見える「断腸」を次のように釈している。

腸ハ断ツ春江欲レ尽ントス頭　枝レ ヲ藝ツ徐ニ歩シテ立ツ二芳洲一ニ

○一二ノ句。断腸ハ。カナシキコトニモ。又アチキナクシテ。タエカネテ。断腸スルコトモアリ。コヽノ心ハ。口ニモ出サレス。画ニモカヽレス。何トモ。エコラエヌ也

（巻下　杜甫「漫興」第一・二句）

本国にあっても、愁嘆を詠じる際の類型表現として夙に用いられてきた。中古にあってはやはり白詩の影響が大きく、『和漢朗詠集』にも、

大底四時心惣苦　就中腸断是秋天

（巻上　秋「秋興」）

江従二巴峽一初成レ字　猿過二巫陽一始断レ腸

（巻下　「猿」）

等の句例の如く、白居易作の四首に「断腸」の措辞が確認される。

杜詩や白詩の伝統的な用法に対し、一方、中世禅林にあってはこの詩語も「多情」と同様、やはり艶詩の中で多用されるものであった。

飛ヲ稍成レ双ヲ宿シテ相並ヲ　簾前暗ニ断二ツ美人ノ腸ヲ一

○三四ノ句。鴛鴦ハ。一双アレハ。捻シテ。離レヌ者ソ。飛ハ双テ飛ビ。宿スレハ並ヒテ。宿スルソ。コレラ。簾中ニアル美人ハ見テ。人シレズニ。断腸スルゾ。アラウラヤ

マシノ鳥ヤアノヤウニ。一日片時ナリトモ。ナラデト思フソ。暗ノ字妙也。人ニハ云ハス心中ニ思フテ。断腸スルゾ

（巻中　九鼎竺重「鴛鴦雛」第三・四句）

右は『中華若木詩抄』所収、本国五山の九鼎竺重の鴛鴦を詠じた一作である。斯詩の如く、「仲睦まじいおしどりを簾中の美女が眺め、孤閨を託つ自分自身に比して断腸の思いに暮れる」という、「美人断腸」の詠法が五山で最も多用される「断腸」の用例であった。これは『玉台新詠』巻第九、魏文帝作「楽府燕歌行」二首連作に見える、

群燕辞帰雁南翔　念二君客遊一思断腸

（第一首　第三・四句）

の如き発想に拠ったものであろう。「美人断腸」であっても、杜詩や白詩のように愁情や憂情を示すことは同一である。しかし本国では唐詩、特に中晩唐詩の重要な一分野である宮詞や艶詩製作に欠くことのできない詩材として受容された「断腸」は閨怨を表す語として理解され、後代類型化されるという展開を示していたのである。一例をあげると、五山僧製作の七言絶句を集大成した『翰林五鳳集』(8)には、二巻を費して艶詩を収めた「恋」部を設けている。斯部の所収詩にも、以下の如く著しい詩句の類型化が見受けられる。

洛下交遊断腸夜　尋レ君幾夢落二滄洲一

（巻第六十三　瑞巌龍惺「寄悟渓年少」転・結句）

一逢一別両般思　纔慰二愁腸一又断レ腸

（同右　江心承董「謝詩」転・結句）

百結愁腸回断腸　多端思惑乱猶滋

（同右　集雲守藤「寄絲恋」転・結句）

また同書巻第三十八「雑　人倫」部には先掲九鼎詩に更に表現の類似した次の句例もある。

隔簾更有断腸処　枕破二斜紅一紛翠香

（琴叔景趣「美人睡起図」）

選集『花上集』にも採録された江西と同門の瑞巌を始め、『風斎疏藁』を著し、四六文に優れた江心らは建仁寺に学んだ詩僧である。艶詩の用例に惟肖や心田の作は殆んど無く、この詩材が建仁寺霊泉院周辺で特に親炙したものであることも知られる。そして後代には用例の枚挙に暇のない陳套化した用法となったのである。

五

こうした「多情」及び「断腸」の義を踏まえた場合、冒頭の江西「竹間芍薬」詩の解釈は多様な世界を含んだものとなってくるのである。以下、順を追って江西詩の解釈を検討していくことにする。

第一に、詩題に見える「芍薬」の喚起する世界を確認する必要があろう。唐土の古典では『詩経』以来、芍薬は男女の思情を陳ぶる象徴として捉えられてきた。鄭風「溱洧」詩の第二節、

維士与レ女、伊其相謔、贈レ之以二勺薬一

に拠るものである。この発想は江西自身の詩嚢にもあった。建仁寺両足院蔵『続翠詩藁』の「花木」部に、「謝人贈紅薬」たる、やはり芍薬に題した七絶が収められており、その転句に次の如く「濠洧」の語が用いられている。

謝人贈紅薬　　江西龍派

天女将花欲染衣　　天女花を将いて衣を染めんと欲すれど
年来衰朽已無機　　年来衰朽して已に無機なり
雨中濠洧多情色　　雨中の濠洧は多情の色
鶩子知従六往帰　　鶩子は従を知りて六たび往き帰る

「濠洧」の語が表す恋情の世界を、江西はやはり「多情」の措辞で表現しているのである。右の七絶は紛れもなく艶書である。既に「芍薬」も艶詩の重要な素材となっていたことが確認されるのである。

しかし、江西詩に見られる「芍薬」の背景は、決して「濠洧」のみに収斂されるものではなかった。芍薬、就中紅薬は中国宋代の劉攽及び王観の著す両『芍薬譜』により、西土江南の楊州を代表する景物でもあった。殊に宋代の類書『百川学海』に収められた王観の著作は、本国禅林でも親しまれ、広く受容されることになる。そして、叢林の詩僧にとって「揚州、江南の芍薬、恋情」と連なった時、想定されるのは唐末の詩人、杜牧に他ならなかった。それは、宋末の蔡正孫編の総集『詩林広記』に採録された黄庭堅の次の一作を契機として、広く知られる所となったと思われる。

広陵早春　　黄山谷

春風十里珠簾捲　　髣髴三生杜牧之
紅薬梢頭初繭栗　　揚州風物鬢成レ絲

（後集巻第五）

右詩の眼目は、同書続けて引用する天社任淵編『山谷詩集注』の詩注に詳しく述べられている。

此れは杜牧の詩語を用いたり。「紅薬」は揚州の芍薬を謂う。『礼記』王制に曰く、「祭天地之牛、角繭栗」と。此れを借用して以て花苞の小さきを言へり。末句は、風物は此くの如くなれど、其の身の老たるを惜しむを謂う也。

（原漢文）

任天社の注記した集注本は、本国禅林で最も普及した山谷詩のテキストであり、五山詩僧の解釈の根拠となった一書である。その任淵が文中に言う「杜牧の詩語」とは、やはり『詩林広記』所収山谷詩に附記された杜牧作「有所見」詩及び「題禅林」詩の措辞を指す。

有所見　　杜牧之

娉婷嫋娜十三余　　荳蔻梢頭二月初
春風十里揚州過　　捲二十上珠簾一総不レ知

題禅林　　杜牧之

觥舡一棹百分空　　十載青春不レ負レ公

今日鬢絲禅榻畔　茶烟悠颺落花中

さて、先掲黄山谷詩は、五山詩僧の『詩林広記』提唱と相俟って、杜牧を詠じた作として本国詩僧に盛んに愛唱されたらしく、その影響下になる詩例を数多く見出すことができる。

芍薬　江西龍派

黄鵠何年啣一枝　黄鵠何年か一枝を啣へ
広陵紅薬落天涯　広陵の紅薬を天涯に落とせり
東風憶著杜書記　東風に憶著するは杜書記
酔捲珠簾鬢似絲　酔ひて捲く珠簾鬢絲に似たり
（『続翠詩集』）

右は江西の作。「唐土から遠く離れた遙か扶桑の地に咲く紅薬を見て、胸に思うのは杜書記、小杜の姿である」というこの七絶、結句の表現は山谷同様「題禅林」詩に拠っており、その影響の大きさを感じさせる。

江西に師事した南江宗沅（一三八七～一四六三）にも同様の詩例が見出せる。

未開芍薬　南江宗沅

楊州風物故人詩　楊州の風物故人の詩
我有一叢添鬢絲　我に一叢の鬢絲を添ふる有り
似待国家賢宰相　国家の賢宰相を待つに似て
小欄春雨放紅遅　小欄の春雨に紅を放つこと遅し
（『漁庵小稿』）

横川景三命名『花上集』にも採られたこの七絶の起・承句、室町末期成立、編者未詳の抄物『花上集鈔』(9)では次の如く釈している。

楊州風物鬢作レ絲ヲト杜牧ヲ作タソ　古人ハ杜牧ソ　我有――
――カウ杜モ作タカ我モカウチヤヨ　芍薬ヲナカメテイタレハ　シラカボウケニナツタ程ニソ……〈以下略〉……

抄者が杜牧作とする詩句は、前掲山谷詩の第四句である。杜牧の詩句以上に、杜牧像造形のために重要であった山谷詩の、五山禅林での称揚がうかがえるのである。

五山詩僧、就中江西が山谷詩によっていかなる杜牧像を作り上げたかを確認するため、今一度、山谷が典拠とする杜牧詩に目を転じてみたい。『詩林広記』所収山谷詩に附記された二首の中、「有所見」詩には謝疊山の釈文が併記されており、注目される。

此れは妓女の顔色の麗しく、態度の嬌（なまめか）しく、二月に荳蔻の花の初めて開くが如きを言うなり。揚州十里の紅楼の麗人美女で、珠簾を捲き上げ、其の姿色を逞す者も皆、此の女には如かざる也。
（原漢文）

即ち、杜牧の艶事を語る詩題として捉えられていたのである。『詩林広記』の編者蔡正孫は、やはり杜牧「有所見」詩に拠った陳無己作「席上勧客酒」七絶を掲げ、

稍開襟抱使心寛　大放酒腸須盡乾
珠簾十里城南道　肯作当年小杜看

愚（正孫）謂う。此の詩、当時の席間に必ず歌う者有り。姝麗の色は亦た是れ杜牧の詩語を用いたり。「小杜」は即ち杜牧也。

（原漢文）

唐土に於て燕席、必ず人々に唱せられるほどに杜牧の艶聞の膾炙していたことを指摘するのである。

杜牧の艶事に関わる逸話の豊富さは、唐代の『楊州夢記』及び、『詩人玉屑』を中心とする宋代詩話の中で集成され、本国禅林でも衆知の故事となっていったことを既に拙稿「一休宗純の杜牧賛について」でふれたことがある(10)。既に前稿で述べたことではあるが、それら数多くの艶事の中で、画題にも取り上げられたことから、本国五山で最も著名であったと思われるのが『麗情集』を出所とする杜牧水嬉の物語である。『詩人玉屑』に採録されたこの説話の梗概は、「若かりし杜牧が湖州で舟遊び（水嬉）を催した折、一人の少女を所望し、十年の後に再び此地に刺史として赴任した時、手に入れんことを約束したものの、三年遅れたために果たすことのできなかったことを歎じた」というもので、次掲、牧之の「悵別」詩の製作契機として記された内容であった。

悵別　杜牧之

自恨尋芳到已遅　往年曾見未開時
如今風擺花狼籍　緑葉成陰子満枝

（『詩人玉屑』巻第十六所収本文に拠る）

この逸話は『麗情集』に既に指摘される如く、湖州を詠じた蘇東坡の七言詩「将之湖州。戯贈宰老」の詩材となったことで、後世広く知られる所となり得たのであった。

東坡・山谷という宋代の二大詩家の影響があまりにも大きかったのか、江西の詩才を培った建仁寺周辺の詩僧には杜牧を詩題にした作例が幾首か見出せるものの、義堂・絶海以降、五山での杜牧像からはその社会性や史家としての側面は欠落し、東坡詩・山谷詩を祖述した常套的な措辞による「淫色」の姿を描くことに類型化されていったのである。

そうした類型を促した要因として、講説の場で江西龍派の果たした役割が非常に大きいのである。一例を挙げると、巧みな風景描写で杜牧詩中、最も人口に膾炙した「江南春」絶句を講じて、江西は次のように述べている。

続翠講云、時節境致モ面白ケレトモトコヲ看マワスモ例ノイヤナ僧寺ハカリテ無興也、京ニテアラウニハサコソ面白カラウスラウト也、是杜牧平生愛ニ女色一之謂也　補（横川景三）義同之

（『幻雲抄』）

文中「是杜牧平生愛女色」という、およそ禅林らしからぬ言及までも見られるのである。

また、『詩林広記』では「題禅院」と題された前掲七絶は、『三体詩』には「酔後題僧院」として収められている。斯詩に

ついても江西は、

　艅艎――続翠云、艅字好シ、イキモツカツ飲テ盃ヲツツテトコニ余瀝ハアルソ、一滴モナイソトミセタ如此十歳ハカリクルウタ時ハ、青春不負我ニ亦不負春也、今日ハ僧ニ交テ結句酒モナクテ対落花風也、昔ハ妓女ノ中ニイタカ今ノナリヲ見ヨ、比興十体也、江南春詩云々此類也

（『幻雲抄』）

「江南春」詩同様、若かりし杜牧の艶聞を眼目としているのである。そして、この杜牧像こそが江西をして「多情」と表現されるべき対象だったのである。

前述、杜牧水嬉説話に取材した「春湖水嬉」という詩題が江西の別集に確認される。

　春湖水嬉　　江西龍派

官船載妓閑清晨　　官船妓を載せ清晨に閑す
柳色初深湖上春　　柳色初めて深し湖上の春
幕府少年無杜牧　　幕府の少年杜牧をおいて無く
多情黄鳥莫蔵身　　多情なる黄鳥身を蔵すこと莫し

（『続翠詩稾』）

第四句、「黄鳥」は当然「江南春」詩の「千里鶯啼云々」という情景を連想させる。若き杜牧を黄鳥、鶯に譬え、艶事に耽ける姿を「多情」と表現するのである。

「多情」は于済撰、蔡正孫補訂『聯珠詩格』に収められた杜牧「贈別」詩に見える詩語でもある。

　贈別　　杜牧之

多情卻似総無情　　惟覚樽前笑不成
蠟燭有心還惜別　　替人垂淚到天明

牧之の意図した「多情」は白居易「多情不及少情人」に類するが如き、神経の繊細さを指すのであり、そこには覚醒した冷静な眼差が感じられる。

だが一方で、この七絶は、清代の馮集梧により集成・施注された『樊川詩集注』には、『詩林広記』所収「有所見」詩に続く連作の第二首として、「贈別」題に統括されて収められている。こうした事実を考慮せずとも、江西が「莫蔵身」で表したのは、真面目な所作の中にも好色さを覗かせてしまう、放埒な「多情」な杜牧の姿以外の何物でもなかった。こうした筆致は一休宗純（一三九四～一四八一）の「賛杜牧」詩の一聯、

欲隠弥彰狂語笑　　隠さんと欲して弥よ彰わる狂語の笑い
多盃酔後紫雲前　　多盃酔ひて後は紫雲の前

（『狂雲集』(11)所収「賛杜牧」転・結句）

に受け継がれていく。江西詩に類するものとして考えてよいであろう。

如上の江西の杜牧像及び杜牧詩解釈を踏まえることで、江西の用いた「多情」の義、及び「芍薬」の世界の多彩さが初めて理解されるのである。

六

艶詩に列なる江西「竹間芍薬」の世界の多彩さは「芍薬」のみに起因しているのではない。同詩の第四句、『中華若木詩抄』では、「捻ジテ竹ヲ美人ニ比シテ。翠袖ノ佳人ト。ナヅクルソ」と注している。第二には、「竹」の喚起する情景を検分する必要があろう。

「竹」と美人の繋がりは、やはり唐宋の大家の作品を出典とするものであった。杜甫の五言排律「佳人」の終聯、

天寒翠袖薄　日暮倚二修竹一

（『杜詩続翠抄』(12)巻五）

がその嚆矢である。しかし杜詩にあっては、肌寒い夕暮の物寂しさの中、翠袖の落魄の美人に配された修竹の風景が、芍薬と共に詠じられる妥当性を有するためには次掲、蘇東坡の一作を俟たねばならなかった。

王進叔所蔵画跋尾五首、芍薬

倚レ竹佳人翠袖長　天寒猶着二薄羅裳一
揚州近日紅千葉　自是風流時世粧

（『四河入海』）

杜詩・蘇詩共に好んだ江西が、その講義録として各々、『杜詩続翠抄』『天馬玉沫』を編したことは既に述べた。『四河入海』ではこの七絶で、佚書『天馬玉沫』をふまえ、江西の言として興味深い解釈を示してくれている。

この詩作は、画幅の中で、竹に寄り添う如くに咲く一葉の芍薬を佳人に比し、「その清楚に美しきこと、今を盛りと咲き誇る揚州の名花、千葉の芍薬の妖艶さを以てしても及ぶまい」と解するのが、惟肖得巌及び彼に師事し、講義録『脞説』を著した瑞渓周鳳の立場である。

これに対し、江西の説はこの両者とは全く異なるものであった。『四河入海』の引く江西の言とは次の一文である。

続翠解不レ然、上二句、無レ幸貞女。此貞女標格不レ凡、雖レ然不レ愛レ之。下二句、揚州濃粧千葉之芍薬、自謂二風流一也。比二此図中之花一則甚俗不レ足レ愛レ之、雖レ然小児衆眩而已。若論二図中之花一、真箇無幸之佳人似レ之。故上二句、賦二貞女之体一、以比二図中之花一也。蕉雪以二揚州幸千葉一為二牡丹一。趙次公注云、紅千葉言二揚州之多葉芍薬一也。某謂、続翠解甚有二滋味一。

（巻第十二）

即ち、典拠である杜詩の情景を活かしつつ、瑞渓らとは逆に、清楚で美しいものの、甚俗な妖艶さに惑わされた人々には鍾愛されることのない薄幸の佳人の姿を画中の花に比し、女性そのものの美しさを描いた点に一詩の眼目があったと釈するのである。蕉雪、即ち惟肖の興味が「千葉とは芍薬か牡丹か」という衒学的な問題に終始しているのに対し、東坡詩に新たな情景や解釈を加えようと試みる江西の姿勢は、杜牧詩に対した時と同様、一貫したものであり、「続翠（江西）解は甚だ滋味有り」とする書中の評価も非常に意味深いものであると思われる。

七

如上の江西の意図を踏まえ、今一度冒頭「竹間芍薬」詩に戻り、その全句を通して解釈するに、斯詩の眼目は、叢竹に独り、孤高の美しさを放つ一輪の花を美女に譬えて、その思情を陳ぶる点にあった。その詩語は表面的には東坡「芍薬」詩に拠っているかの如くである。しかし、「多情」の一語を以て、美人への恋慕を示すには、「芍薬」により喚起される『詩経』「溱洧」詩と、杜牧の逸話とが必要であった。それは蘇東坡・黄山谷という宋代の大家により提唱された詩材ではあったものの、本国五山では江西龍派が自らの講説により詩壇に敷衍していった解釈でもあったのである。そしてその中心に在ったのが『三体詩』伝授であった。応永期以後、師弟関係の確立した五山詩壇では詩題は類型化の一途を辿ると言われている。事実、江西の示した「芍薬、杜牧、恋情」の艶情の世界も、後代の艶詩流行の中ではありふれた表現となっていった。『翰林五鳳集』巻第六十二、恋部には、

燕紫鶯黄春去時　当階芍薬始離披
三生有約被二花悩一　我亦揚州杜牧之
（「紅薬数茎。呈上――仙君真珠簾下。副艶詞一首。」）
当階芍薬殿春風　三四茎開暁露叢
我有二佳人菩薩面一　看来花亦似レ無レ紅
（「紅薬数茎。献呈――佳少研右。詩以述卑懐云。」）
芍薬梢頭暁露芳　満階風物似二維揚一
紅顔花亦有二慚色一　十倍曹丕年少粧
（「紅薬数茎。呈上――佳丈研右。繋以小詩云。」）

の如き、類似した語句を用いた艶詩が多数見出せるのである。しかしこうした常套化も、友社による独自な詩材として継承された結果に他ならないのである。

江西「竹間芍薬」詩は艶詩である。しかしその作品には表現上の措辞のみからでは量り得ない豊かな背景があった。そしてそれら詩題や詩語を講釈によって後の世代に受け継いでいった点に、叢林四絶の一、講釈を以てその名声を謳われた江西龍派(13)の五山文学史上の大きな意義があるのである。

注

(1)『中華若木詩抄』本文は、国立国会図書館所蔵寛永版（中田祝夫氏編『勉誠社文庫』二十に影印所収）に拠る。
(2)蔭木英雄氏著『五山詩史の研究』（昭和五十二年　笠間書院）第三章　第四節参照。
(3)『日本古典文学大系』七十二所収本文に拠る。
(4)五山詩の引用は以下、特に言及しない限り『五山文学全集』『五山文学新集』所収本文に拠る。
(5)内閣文庫所蔵天文五年写本（中田祝夫氏編『抄物大系』に影印所収）に拠る。

(6)江西龍派の古典学の評価についての端的な例としては、笑雲清三編『四河入海』の序文で、「日本坡詩講談師」の一人に掲げられていることがある。
(7)国立国会図書館所蔵寛永十四年版本（中田祝夫氏編『抄物大系』に影印所収）に拠る。
(8)『大日本仏教全書』（鈴木学術財団編　講談社）芸文部所収本文に拠る。
(9)内閣文庫所蔵室町末期写本に拠る。
(10)本国禅林における杜牧詩の受容に関しては、拙稿「一休宗純の杜牧賛について」（『語文』第五十三・五十四合併号平成二年）で一部考察している。併せて参照されたい。
(11)伊藤敏子氏「孝異狂雲集」（『大和文華』第四十一号　昭和三十九年）に拠る。
(12)建仁寺両足院所蔵写本（大塚光信氏編『続抄物資料集成』に影印所収）に拠る。
(13)内閣文庫所蔵室町末期写本『花上集鈔』所収太白真玄詩の注記に拠る。

（なかもと・だい　本学大学院博士後期課程）